

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00784

研究課題名(和文) 英語教育における要約プレゼンテーションによるCLIL方式の効果研究とマニュアル化

研究課題名(英文) Study of the effect of CLIL summary presentation and the compilation of its manual for English teaching

研究代表者

磐崎 弘貞 (Iwasaki, Hirosada)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：50232658

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：専門分野授業を英語で行う内容言語統合型学習(CLIL)/英語媒体の授業(English Medium Instruction)において、教師が単に講義を英語で行うだけでなく、学習者に英語を発信させる機会を多く設けることが必要である。その際、日本人学習者が発表者になる場合も聴者になる場合にも言語サポートが必須となり、そのポイントとなるのが、低頻度語やイディオムを平易な言葉で表現するパラフレーズのスキル、ビジュアル情報を使って即興で発表をするスキル、内容をインプットする際に語と語の慣用的つながりであるコロケーションを判別しリユースするスキルが重要であることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中学から大学に至るまで、英語教員の英語熟達度が高い場合、どうしても自身が英語を駆使した授業を行いがちである。しかし、本研究では、そうした状況では必ずしも学習者の英語発信能力が高まるわけではなく、教授者が言語サポートのノウハウを知ったうえで授業を行う必要がある。本研究では、これをコロケーションの認識、英英辞典を適宜活用したパラフレーズの手法、ビジュアル情報をキーワードのみを使って(原稿なしで)発表を行う練習方法についてノウハウを提供し、それをマニュアル化(順次様々なサイトで公開)した点に特徴がある。

研究成果の概要(英文)：As for Content and Language Integrated Learning (CLIL) or English Medium Instruction (EMI), it is vital for teachers not only to give lectures in English but also to encourage and involve students to actively engage in discussion and to make effective presentations in English. In so doing, giving language support is also essential for students as listeners or presenters. The present study has revealed that important skills for such environments are (a) paraphrasing low-frequency words and idioms, (b) making impromptu presentations using visuals, and (c) recognizing habitual and semantic combinations of words known as collocations and reusing them.

研究分野：英語教育学

キーワード：CLIL EMI コロケーション プレゼンテーション retelling 英語発信能力 パラフレーズ

1. 研究開始当初の背景

小中高の英語授業に関する新学習指導要領において、英語での4技能5領域を統合した学習が必要とされ、特にスピーキングにおけるやり取りおよび発表の2領域化によって、より一層英語での発信能力の育成が重視されている。加えて、大学においても、留学生の増加による英語授業に増加があり、そして何より、日本人大学生の英語がグローバルにはレベルがまだまだ低いこと、そして在学中に必ずしも英語熟達度が伸びていないことが問題として挙げられている。

そこで、大学においては、共通科目として英語だけではなく、英語で専門授業を実践する内容言語統合型学習(CLIL)あるいは英語媒体の授業(English Medium Instruction)が注目されている。しかしながら、それは英語教員ではない教員が専門授業を英語で教える機会が増えるということであり、英語力運用能力が低い大学生に授業を実施する上では多くの障壁があるのが現状である。

よって、本研究では、専門内容を英語で実施する際、どのような言語サポートを行い、どのような授業運営をすることで、より効果的に授業ができるのを追求すること、そしてそのノウハウを英語教員はもちろん、非言語教員にも提供することを目指して研究を進めることとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3点である。

(1)大学生に対して専門科目や内容重視の授業を英語で行った場合、どのような点が理解の障害となるかを調査する。

(2)大学生が専門科目や内容重視の授業において英語発表(プレゼンテーション)を行った場合、どのような点が障害となるかを調査する。

(3)上記問題を解決するために、どのような言語サポート(足場架け)が必要であり、どのような授業運営方法が必要であることを示しマニュアル化する。

3. 研究の方法

(1)大学において、内容を重視した英語共通科目、および英語で行う専門科目で題材に関する要約プレゼンテーションを課す。

(2)題材としては、webでビデオが閲覧可能なTED Talks、および英語で書かれた専門科目の著書を利用し、それについて英語での要約発表を行う。

(3)発表者側の問題を、聴者側の理解の観点から観察し、どのような点が理解を妨げているかを調査する。

(4)既に英語で専門科目を教えている教師と議論し、どういう点がうまくいき、どういう点に問題があるかを調査する。

(5)上記観察に基づき、より効果的な発表方法および理解の方法を指導する。

(6)問題点がどのように改善されたかを調査する。

4. 研究成果

本研究の結果、以下の点が明らかになった。

[言語面でのサポートについて]

(1)題材がビデオであれ活字であれ、インプット時に、そうした題材で使われているコロケーションについて注目させる必要がある。たとえば、「季節のアレルギー」といった問題を扱う教材の場合、単に「花粉症」(hay fever)や「鼻水」(a runny nose)といった名詞にのみ着目するのではなく、be suffering from hay fever(花粉症にかかっている、困っている)、have a runny nose(鼻水が出る)といった動詞+名詞のような内容語同士のつながり(=コロケーション)に着目させないと、発表においてそれがうまく使用できず、また聴者として理解が困難になる。よって、こうした点を教師がglossaryであらかじめ提示するか、学習者自身に着目させる活動を行う必要がある。

(2)原典で使われる難解な表現やイディオムは、そのまま使用するのではなく、パラフレーズさせることが必要である。CLIL授業の発表と理解において重要なのはメッセージであり、言語表現そのものではない。そこで、低頻度語(=学習者にとって難解な語)はより高頻度な表現(=より易しい表現)にパラフレーズ(言い換え)する手法を指導する必要がある。例えば、以下の文においては、下線部が難解な表現と言える。

- The figure is **equivalent** to 7 jumbo jets crashing every year.

- Some music **triggers** negative feelings.

こうした場合、そのまま使ったでは聴者に理解が及ばないため、以下のような高頻度語に言い換えて発表した方が聴者の理解を促進する。

- The figure is **equal** to 7 jumbo jets crashing every year.

- Some music **causes** negative feelings.

上記の場合、同義語を使っているが、同義語によってはコロケーションが異なる場合があるので、

その点についても注意を喚起する必要がある。たとえば、「A と B が同じである」と表現する場合、異なる形容詞によってコロケーションの異同があり、以下のような対応となる。

A is **equivalent to** B. = A is **equal to** B. = A is **the same as** B.

(3) 上記パラフレーズについても訓練が必要である。その際、以下のパラフレーズ手法があることを指導する。

同義語を利用する。

It is difficult to **comprehend** the statement. → It is difficult to **understand** the statement.
反意語が高頻度語の場合、それに否定辞を付けて利用する。

This fruit has a **sour** flesh. → This fruit has a **non-sweet** flesh.

パラフレーズ表現が思い浮かばない場合、英英辞典の定義をパラフレーズのサンプルとして利用する。

This object is oval (= 楕円形の) . → 英英辞典定義 oval: egg-shaped → This object is egg-shaped.

この場合、単一の単語 oval に対して、同義語である egg-shaped はコンポ表現(compositional expressions)と呼べるもので、これだと平易な表現の組み合わせでできているため意味の推測が容易であることに加えて、それ以外の表現に多様な応用が可能である点に注目できる。例：egg-shaped (卵型の、楕円の) → M-shaped (M字型の) → star-shaped (星型の) → cat-shaped (ネコ型) など。

(4) 専門用語使用時には英語定義をする、または母語の対応語を示す。

前項目でパラフレーズの重要性を述べたが、専門用語についてはそれ自体を学ぶことが必要で、言い換えをすることは適切ではない。そこで、平易な英語表現で定義をすることが必要である。以下はその2例である。

volcano: a mountain with a large opening at the top. Gases and hot liquid rock come out through it into the air.

incubation period: a period during which a person is infected with the virus but does not show any symptoms

ただし、聴者が日本人学生の場合、基本的な専門用語は日本語訳で代用することも適宜必要である。例えば、上記については、その英語定義に加えて、またはそれに替えて「火山」「潜伏期間」といった日本語訳を与えることも検討すべきである。なぜならば、既に日本語ではそうした専門用語について、日本人学習者は十分な知識を持っているからである。こうした日本語の部分的限定的使用は translanguaging (言語変換) と呼ばれる。

[授業運営 / 発表自体についての指導]

さらに CLIL / EMI 型授業については、以下のような授業運営 / 発表について心得ておく必要がある。

(1) 質問による動機づけ、巻き込みを行う。

しばしば「CLIL/EMI = 英語講義」と単純化して理解されていることが多い。しかしながら、英語で授業を受けるという不安を取り除き、講義 / 発表に引き込むためにも簡単な英語で質問をすることが肝要である。ただし、この場合、必ずしも正答を求める必要はなく、単に意識を活性化させる(raise consciousness)でもよい。たとえば、空港などにおいてコロナウィルス罹患者の発見に犬が使われることを扱った題材ならば、冒頭で両者に関連するイラストを示した上で、



“We’ll discuss coronaviruses today. Before we do, think about the connection between dogs and coronaviruses. How do you connect them? Any ideas?” のような導入(oral introduction)をすることが考えられる。また、それ以降も適宜受講者に質問をすることで、参加意識を高めることができる。

(2) 言語サポートを指導する教員 FD の必要性あり。

既に言語サポートの必要性を述べたが、効果的授業については、たとえ非言語教員による専門科目授業であっても、一定の言語サポートを実施すべきである。ただし、こうした点については、英語教員が CLIL における言語サポートの手法を教員 FD 等の形式で講習を行う必要があるであろう。

(3) ペアワーク、協働学習の機会を与える。

CLIL/EMI 授業は、単に教師が英語で講義をすることだけを示しているわけではない。学習者に授業に積極的に参加してもらい、英語を - 特に発信面で - 多用してもらうためには、ペアワークやグループワークといった協働学習の機会を設けることが必要である。言語と内容のバランスはトレードオフに関係にあるため、こうした協働学習により内容の教授量が減ることは、初期

段階では妥当な状況であり、CLIL が進むにつれ内容に重点がシフトする意識を持つことが必要であろう。

(4)発表の機会を設ける。

前項とも関連するが、CLIL 授業においては、学習者に発表（プレゼンテーション）の機会を与え、アウトプットを意識したインプットを行うとともに、以下にわかりやすく伝えるかを工夫させることで、発表者の理解も増やすことができる。そして、言語サポートで述べたパラフレーズやコロケーションの意識化の実践の場とすることができる。

(5)発表手法について指導する。

パワーポイントなどを使って効果的に発表をすること自体についても、CLIL の枠組みで指導することができる。そこで、例えば、以下のような点を指導することで、聴者の理解を高めるだけでなく、発表者自身の題材に対する理解を深め、英語の発信力向上に役立てることができる。

発表資料（スライド）では、1枚1メッセージとする。

十分大きいフォントを使う。

言うべきことを英語の完全文で示すのではなく、キーワード/フレーズを用いて示し、それをその場で説明する。

全てを記したメモを見ながら発表するのではなく、スライド上の上記キーワードを見て聴者に語るできるように練習する。

スライドのどの部分について語っているのかを示すために、その箇所の色を変える、文字を大きくする、アニメーションを用いるなどして、聴者の焦点をコントロールする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 磐崎弘貞	4. 巻 69 (10)
2. 論文標題 オンライン授業での辞書指導DOs&DON'Ts	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 英語教育（大修館）	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iwasaki Hirosada	4. 巻 Special issue
2. 論文標題 Learning and Expanding What Nijmegen Tells Us About CLIL	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Journal of the Japan CLIL Pedagogy Association: Special issue Proceedings from the J-CLIL TE Seminar	6. 最初と最後の頁 134-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 磐崎弘貞	4. 巻 611
2. 論文標題 リサーチ・ユニバーシティにおける語学教育改革	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 IDE 現代の高等教育	6. 最初と最後の頁 17-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Iwasaki Hirosada
2. 発表標題 CLIL Teacher Training in a Research University
3. 学会等名 The 3rd J-CLIL Annual Bilingual Conference
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Iwasaki Hirosada
2. 発表標題 Retelling Semi-Academic Talks in English Classes
3. 学会等名 映像メディア英語教育学会東日本支部
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Iwasaki Hirosada
2. 発表標題 Putting CLIL into Japan's Context: Customize, Motivate and Dramatize Your Class
3. 学会等名 第2回J-CLIL東北支部大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iwasaki Hirosada
2. 発表標題 Use of “ collocation-based ” glossaries for boosting CLIL skills among Japanese students
3. 学会等名 日本CLIL教育学会第2回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iwasaki Hirosada
2. 発表標題 Learning & Expanding What Nijmegen Tells Us About CLIL
3. 学会等名 The 2nd J-CLIL Teacher Education Seminar
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iwasaki Hirosada
2. 発表標題 Focusing on Paraphrasing in CLIL/EMI
3. 学会等名 日本CLIL学会例会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 卯城祐司・櫻葉みつ子（分担執筆：磐崎弘貞）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 215
3. 書名 新・教職課程演習第18巻 中等英語科教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------